

ずいそう

能面の魅力に魅せられて天下一をめざす。

北御門 義 廣



「ご趣味は何ですか？」と聞かれ、「エート」あまりに多すぎてどれを答えてよいのやら。しかし、時代・環境・私自身の体力等により盛衰があるため、若い頃にやっていた野球・バレーボール・テニス・柔道・空手等のスポーツ系は、既に古希近くともなれば卒業引退となっている。

老人の仲間入りをしてからの趣味としては写真撮影・水墨画・禅画・能面打ち等が加わったので、この機会に能面の魅力についておしゃべりさせていただくことにする。

代表的な能面として、女系では小面と言う若くて最も美しいといわれる面が有るが、美術館等で観察すると僅かだが左右対称に出来ていないのにお気付きでしょうか？

言われて見ればなんとなくと言う程度であるが、向かって右の眼尻、口元が左に比べて上っている。これは喜怒哀楽を全て表現出来るよう工夫されたもので、実に巧妙に作られているのである。

ご承知のように、能舞台は向かって左側に「橋掛かり」と言う演者が出入りする通路が有り、通常は、悲しげな俯き顔で登場する。この時観客からは面の右半分しか見えていないので、その部分を泣き顔にみえるように作るのである。

舞台では、演者が身振り手振りを加え面の左右を使い分け、上を仰いだり俯いたりすることで、その場の表現を自在に演出出来ることになる。このため正面からみると全てが中途半端ではあるが、どちらに偏るわけでもなく、違和感のないものでなければならないのである。俗に言う「能面みたいな顔の人」とは、喜怒哀楽が全て中途半端なところからきた、たとえだろうと思われる。

最後はさすががしい顔で橋掛かりへ向かうと、客席からは面の左側だけ見えていることになるわけで、こちらは笑い顔に作られる。

次に、面の裏側であるが、一般の方には見る機会が無く、なじみが薄いであろうが、ここにも知恵がかかされている。

演者は動きが遅くたいした運動量には見えないのであるが、視界が狭く衣装が重く、大量な汗が流れ出る。

なおかつ面は額に括り付け最後まではずすことは許されない、この状態で四隅の柱を頼りに舞台を動き回る。薪能で屋根も無いのに柱だけ立っているのはそのためであろう。すり足で足元を確かめながら前進するときは鼻の穴から自分の足が見えるように作ってある。女面でも鼻の穴が思いのほか大きいのはこのためである。

心配な汗の処理であるがこれを間違えると眼穴から出ると涙に見え、まして鼻や口から零れると悲惨なこととなる。

面を自分で打つ場合、材料は木であればどの様な種類のものでも良いのであるが、素人でも扱い易いのはヒノキであろう。床の間に飾るのであればクスでも打てるが、実用として使用するにはキリが軽くて扱い易い、ただし刀を良く磨がないと、ひっかいた状態になり、けばだち出来上がりがみじめになる。

一面仕上げる期間は約一年。出来た面を壁に掛けて展示しているが、子供達特に年少者は「恐ろしい」と言って部屋に入ろうとしない。能面は本来人間の顔で表現できないような怨霊・悪魔・幽霊・鬼のたぐいを面で表現したものであるが、長期間手元で打ち上げる間に情が湧くのか、私にはそれぞれ味わいのある良いものに見えている。また好きな娘に似てくるとか、怨念がこもっている等と言われ、評価としてはイマイチで、魅力を感じているのは私だけかもしれない。

最後に、製作者からのお願いで失礼であるが、チャンスが有り能面を直接手に取って見せていただく折の注意点として老婆心ながら一言。能面の裏側は漆で固め、今はカシウを使っているため肌で触れても心配ない。しかし、表は胡粉による色彩を付け時にはススで古さを出して仕上げているため、表面の防護がなされていない。このため、安易に掴むと指紋が付き、しみとなり、場合によっては価値が下がることさえあるため、マナーとして耳の位置にある紐穴付近以外は、素手では絶対にさわってはいけません。

乙女が嫉妬に狂い、鬼となった般若の面を何度修正しても、笑い顔に見えてしまう自分の腕の未熟さを実感しつつも、この趣味はやめられない。